

9月20日に開幕したラグビーW杯日本大会は、日本代表が初戦のロシア戦に快勝、第2戦では優勝候補であるアイルランド戦に勝利、第3戦のサモア戦でもボーナスポイントを獲得する4トライで勝利するなど、大きな盛り上がりを見せています。ラグビーの熱戦を楽しむ上でも、日本代表には更に勝ち進むことを期待したいと思います。

フォワード戦など身体と身体の激しいぶつかり合いの競技で、スクラムやタックルなど手に汗握る場面が続きますが、その一方で、試合終了「ノーサイド」となると、両者がエールを交換し、健闘を称えあう姿は実に清々しいものです。

ところで、「ノーサイド」(No side)の言葉は「戦いを終えたら両軍のサイドが無くなり、敵味方の区別なく同じ仲間であるという精神に由来する」とあります。健闘を称え合い相手に敬意を払う精神は現在も脈々と続いています。不思議なことに、試合終了を「ノーサイド」と呼ぶのは現在では日本だけとなり、世界的には「フルタイム」(Full time)というそうです。

こうした相手に対する敬意を払う姿は、例えば柔道でもみることができます。講道館の嘉納治五郎氏が進むべき道として示した「自他共栄」という言葉がありますが、「戦う相手がいるからこそ、自分を磨き高めることができる」として、相手を尊敬の対象としています。このことは柔道家から教えていただいたのですが、「礼の精神」は日本人の精神文化として、柔道に限らずに日常生活においても広く根付いていることを感じます。

だからこそ、我が国においては、「フルタイム」ではなく、「ノーサイド」が似合うと思いますし、ラグビー中継や報道などでも、今後も使い続けてほしいと思います。

昨今では、日本人に寛容性が失われてきているとの声もありますが、「ノーサイド」や「自他共栄」の精神で互いに尊敬し合い、「お互い様」の広い気持ちをもつことが、人間関係、人との付き合いにおいて、ゆとりを生じさせるのではないかと思います。

今回のW杯を契機にラグビーへの関心が高まり、いままで以上に競技が活性化することを期待するとともに、この大会のレガシーとして「ノーサイドの精神」が私たちの心に留まり、日常的に尊ばれたらすてきなことだと思います。(N.W)